

エレベーター

黒羽 英二

登場人物

男

女

死体運搬人 1

死体運搬人 2

時 いくつかある日

所 高層ビル内部のエレベーター及びその他

エレベーター始動時の奇妙な低い音。つづいて昇って行く時のかすかな音。ややあって、止る時の奇妙な低い音。(現在では、機械が進歩していて、ほとんどこれらの音は聞えないことが多いが、この場合あの肉体に伝わる無気味な、生理的嫌悪感を催す軽い衝撃を音に変えて客席に響かせる必要がある。)

幕開くと、舞台中央、またはやや上手寄りにエレベーター。そのスペースはかなり広く、扉はやや下手に向いて居り、扉から入って左側に、操作ボタン等があり、右側の壁面だけが取り払われたというような横断面を示している。

今、このエレベーターの中に、ひとりの水色のシャツを着た男が仰向けに倒れている。恐らく死んでいるのだ。蒼白い照明が当たっていると尚いい。

操作ボタンの前に、女がひとり立っている。サスペンションライトがそれを彫像のように浮きあがらせている。極くありふれた、どこデパートでも見かけるエレベーターガールといったところだが、その女は、何か無機物のみに特有の、冷たい非人間的なものを感じさせる。

丁度、エレベーターが下から昇ってきて止ったところだ。

女 (扉を開けて、機械的に扉の方を向いたままで)お待たせいたしました。六階でございます。

しかし、何の変化も起らない。その声はただむなしく、下手の空間に吸い込まれてしまったかのようなのである。

女 (ほんの少し大きな声で、もう一度繰り返す。姿勢はそのまま)お待たせいたしました。六階でございます。

やはり前と同じだ。あたりには何の変化も起らない。

女 (前よりも、さらに大きな声で)お待たせいたしました。六階でございます。

すると、おどろいたことに、女の声がエコーとなって、響いて行くではなか。しかも、女はそのエコーが消えるのも待たないで、同じ言葉を、次第に早口に重ねて行く。

女 お待たせいたしました。六階でございます。お待たせいたしました。六階でございます。お待たせいたしました……

下手から、二人の男が、担架（あるいは重症の患者を寝たまま運べる移動ベッドでもいい。）を持って現れる。二人とも同じような白い上っ張りを着ている。実験室で劇薬を扱う化学者のようであり、珍しい肉料理を作る時の料理人のようでもあり、また、死体解剖に立ち合う医者のものである。彼等は、少くとも二十年間は同じ職業に携わってきた人間の、習慣的な身のこなし、口のきき方をする。（機械的に平らな喋り方で統一してみるのも面白い。）1、2は次の言葉で交しながら、下手から上手のソデ近くまで行き、また下手へ向って戻り、ぐるりと上手へ向ってエレベーターに入る。つまり大きくSの字を描いて、そこに長い廊下があることを示す。ライトでフォローするといひ。

死体運搬人1 （担架の先頭に立って、のろのろと出てきて）スピードのペースは？

死体運搬人2 （担架のうしろを持って現われ）「家を出ると、ろくなことはありません。せ

ん。当分、閉じこもること。」

死体運搬人1 じゃ、同じくスピードのキング？

死体運搬人2 「ひどい誤解。」

死体運搬人1 クイーン？

死体運搬人2 「恋人を自由に放任しすぎていますよ。」

死体運搬人1 その通り。ではジャック？

死体運搬人2 「恋をしているなら失恋。試験があるなら落第。商売は損。」

死体運搬人1 それだけ？

死体運搬人2 まだ何かあったっけ？

死体運搬人1 だめだなあ。「もう遅すぎます。」

死体運搬人2 「もう遅すぎます。」か。そうだった。そうだった。

二人は「ソロモンの指環」（トランプ占い）に熱中している。

死体運搬人1 順番にやっているのに、覚えてないところがあるようじゃ、まだまだだな。

死体運搬人2 としのせいかな。この頃、めっきり、物覚えが悪くなったみたいなんだ。

死体運搬人1 そんなと、でもないだろうに。

死体運搬人2 もう少しつづけてみてくれ、おねがいだ。

どちらからともなく二人は、担架を下ろしてしまふ。

死体運搬人1 よし行こう。ではつづきだ。(短い間) スペードのテン!

死体運搬人2 「しばらく異性から目をつぶった方がよろしい。出来れば一生独身がいいのですが。」

死体運搬人1 いいぞ。ナインは?

死体運搬人2 「商売女の口車に乗りかけています。」

死体運搬人1 その調子! エイトは?

死体運搬人2 「辛うじて損のない程度の取引き。」

死体運搬人1 セブン!

死体運搬人2 「外出すると馬鹿をみます。」

次第に、二人の口調は激しく速くなってくる。

死体運搬人1 シックスは?

死体運搬人2 「なにも、やけくそになることはありません。また新しく種をまく事からお始めなさい。」

死体運搬人1 (上機嫌で死体運搬人2の肩をたたき) 出来た、出来た! 全部全O・Kだ! 完璧だよ。

死体運搬人2 (跳び上がってよろこび) それじゃ、スペードのジャックだけだ、完全じゃなかったのは!

死体運搬人1 そう、そう。ジャックだけだった。あとは完全だよ。

死体運搬人2 ありがとう、ありがとう。

よろこびのあまり、二人は、思わず担架のまわりで、両手を組みかわして跳ねまわる。

女 (二人が登場した時、例の「お待ちでしたしました。……」は止めていが、依然として無表情のまま) お早くねがいます。

死体運搬人1, 2抱き合ったまま、びたりと跳ねまわるのをやめて、エレベーターの方を見る。が、すぐ顔を見合わせると、いそいで担架を持って、エレベーターの方へ歩き出す。

死体運搬人2 じゃ、いよいよ今度はませこぜにしてどこからでも聞いてみてくれ。

死体運搬人1 よし、では行くぞ。ダイヤのセブン!

死体運搬人2 (元気よく大声で) 「片想い。……しかし諦めよとは申しせん。」

死体運搬人1 (早口に激しい口調で) クラブのクイーン!

死体運搬人2 「あまり気どるとかえってこっけいに見えますよ。」

死体運搬人1 同じくクラブのシックス！

女 (死体運搬人の答より早く) お早くねがいます！

二人はすでにエレベーターの中に入っている。死体運搬人2、答えようとして口を開けたまま、死体運搬人1と共に棒立ちになる。死体運搬人1、2のすぐ足もとに、例の水色のシャツを着た死体が横たわっている。

死体運搬人2 (タイミングをはずしたが、やはり答える) 「もう少し、おちつくこと」

以下、死体運搬人1と2は、「ソロモンの指環」の練習をつづけながら、1が死体の上半身を、2が足の方を持ってエレベーターの外へ運び出し、担架に載せる。その間、彼等の興味を完全に奪っているのは、あくまでトランプ占いであって、死体運搬人の動作は、うわの空であることを示さなければならぬ。

死体運搬人1 (死体を抱き起こして) よいしょっと。ダイヤのエースは？

死体運搬人2 (同じく死体の両足を持ち上げて) 「金に関して心配はない。」

死体運搬人1 いいぞ！(死体をエレベーターの扉から運び出しながら) 次は、ハートのセブン！

死体運搬人2 ええと、「愛は死よりも強し。」じゃなかった、「不意に、思わぬところから来る幸福。うっかりしていると逃がしてしまいます。」

死体運搬人1 その調子！

死体運搬人2 (思わず死体の足を放して) ああよかった。やっぱり当たったね。

女 (無表情) お早くねがいます。

死体運搬人2 (また死体の足を持って) ねえ、もつと聞いてくれよ。

死体運搬人1 (担架に死体を載せながら) いいとも！ じゃんじゃん行け。ハートのキング！

死体運搬人2 (同じく死体を担架に載せながら) 「速やかに結婚すべし。」と、どうだい。

死体運搬人1 (担架に載せてきた白い布を手早く死体にかけてながら) だめ、だめ。一言足りないぜ。

死体運搬人2 (白い布を死体の足もとに引っ張りながら) 足りないって！ ハートのキングだろ。

死体運搬人1 そうとも、ハートのキングさ。

死体運搬人2 「速やかに結婚すべし。」(と首を傾げる)

死体運搬人1 (笑って) キングを忘れるようじゃだめだな。「持つ程悪し。」さ。

死体運搬人2 (くやしがつて、左手の掌を右手のこぶしで打って) 今、言おうと思って

たんだ！

死体運搬人1 考えてるようじゃだめなんだよ、占いてやつは。ぱっぱとすばやくや

らなくちゃ。誰も信用してくれないぞ。

死体運搬人2 信用ねえ。

女 お早くねがいます。

死体運搬人1 (担架を持ち上げて)信用第一。もっとせつせと練習することだな。

死体運搬人2 (同じく担架を持ち上げて)そうだな。まだ練習不足だ。おねがいだから、

つづけてくれよ。

死体運搬人1 (下手へ歩きながら)いいとも。クラブのテン！

死体運搬人2 「変な想像はやめたがよろしい。身体によくありませんから。」

死体運搬人1 ようし。つづいてクラブのサイン！

死体運搬人2 「幸福はやって来ます。必ず……。」

死体運搬人1 それから……。

死体運搬人2 それから……。ええと……。

死体運搬人1 「しかし、ゆつくりと。」

死体運搬人2 「しかし、ゆつくりと。」か。なあんだ。じゃ、次は？

死体運搬人1 (すでに下手へ退場している。声のみ)ハートのクイーン？

死体運搬人2 (これも下手へ退場している。声のみ)「よろずよし。大吉。」

6

ほとんど入れちがいに、下手から、クリーム色のセーターを着た男がひとり登場する。長い間、何かを探し求めてきたという感じだ。その挙動には、疲労の影が染み込んでいる。男は下手から上手近くまで行き、また下手へ向って戻り、ぐるりと上手へまわってエレベーターに近づく。そこに長い廊下があることを示しているのだ。苦しげである。

女 (機械的に)御利用のかたは、おいそぎください。

男は、誰もいないと思ったのに、人の声が、しかも女の声がきこえたので、おどろいて、エレベーターの方を、女の方を見て、自分のことかというしぐさで、右手の人差し指を自分の鼻のあたりに持って行く。

女 (それに答えず、やや大きな声で)御利用のかたは、おいそぎください。

男は、吸い込まれるように、エレベーターの中へ入って、くずれるように、上手寄りの壁面に、股を開いて腰を下ろし、身をもたせかける。女を照らしているサスペンションライトが消えて、エレベーター内が明るくなる。

男 (ようやく落ちつきを取り戻して) ああよかった！ これで安心だ。
女 (扉を閉めて、男を無視したまま) 上へ参ります。御利用の階数をお知らせねがいま
す。

エレベーターが始動する時の奇妙な音。照明によってエレベーターが昇って
行くことが示される。都合によって、この照明はなくてもよい。

男 (とび起きて) 上だって!! (及び腰で、おすおすと女に近づき、恐怖と好奇 心
の入り混った心で、じろじろと女を眺めながら) もうたくさんだ！ やめてくれつ
たら！ (どなる) 上はたくさんだ！ おれはもう上には行きたくないんだ！

女 (機械的に) 御利用の階数をお知らせねがいいます。

男 (エレベーターの奥の壁——つまり、上手寄りの壁——にへばりついて) 上には行
きたくないったら！

女 (機械的に) 御利用の階数をお知らせねがいいます。

男 (怒って猛然と女の方へ突進し、必死になってボタンを守ろうとする女ともみ合っ
て) 誰が上へなんか行くもんか！ (とボタンを押してエレベーターを止めてしま
う)

奇妙な音を立ててエレベーター止まる。

男 (ボタンの前に立ちほだかって、呼吸を整えながら、髪をかき上げて) まったく君は
強情な女だなあ。

女、エレベーターの奥に呆然と立ったまま男を見ていたが、不意に両手で顔を
覆って泣き出す

男 (女が泣いたのを見ておどろき) 君は、君は泣いてるんだね！ (傍へ寄って女を 慰
めるといふよりは、女が泣いているかどうかを確かめるようにのぞき込む)
え、本当に泣いてるんだね。(女は顔に両手を当てたまま、幼児のいやいやというし
ぐさをする) すばらしい！ (男は跳び上ってよろこび) はじめてだ、こんなこと。
(女に近づいて言いわけするように) だけど、ごめんね。せっかく君が泣いてるのに、
よろこんだりして。だって、あんまりめずらしかったからさ。このビルの中じゃ、誰
も泣きも笑いもしないんだもの。

女 (泣きじゃくりながらも、次第に顔に当てていた両手を開いて指の間から男を見て)
いいのよ。(鼻をすする) あんたってやさしいのね。

男 (てれて) それほどでもないけどさ。あんまりめずらしかったからね。

女 (両手を放して泣き笑い) あんただってめずらしいわ。
男 ぼくが!! ぼくのどんなところがめずらしいのさ。

男は先に腰を下ろし、女の右手を引つ張って腰を下ろさせようとする。女もつられて床に腰を下ろす。

女 (口の中で笑って) だって、あんなに、へとへとになって、まるで酔っぱらいみたい
にふらふらしていて……、あんたみたいにふらふらしているのはめずらしいのよ。
ここじゃ、みんなもつとしっかりしてるわ。

男 君だって、すぐくこわかったぜ。(口まね) 「御利用のかたは、おいそぎください。」
「上へ参ります。御利用の階数をお知らせねがいます。」

女 (急に蒼ざめて立ちあがり、ボタンの方へ近づいて、男ともみ合う) 大変だわ! ど
うしよう、こんなところで……。

男 (女を押しつけて、ボタンを確保し) 心配するなよ。(髪をかきあげて) たまには休息
が必要だぜ。

女 (再び両手で顔を覆って泣く) あたし、どうしよう。

男 あ、また泣いてる! (女の顔をのぞき込んで) 本当に泣いてるんだね、君。
女 (両手で顔を覆ったまま) そんなにうれしいの、あたしが泣くの?

男 うれしくないさ。ただめずらしいんだ。だってこのビルじゃ、誰も泣かないんだか
らな。特に、エレベーターガールときたら一番ひといぜ。年中、石膏みたいなこわ
い顔してさ。「御利用の階数を……。」

女 (すばやくボタンに近づく。男、押し返す。争いながら、女、男の肩越しに数字を
読む。) 二十八階と二十九階の間ね。

男 (女を押し戻して) 気にするなったら。
女 (素直に押し戻されて腰を下ろし) いいのよ。ここがどこかってことさえわかって
いれば……。

男 (やはり腰を下ろして) どうしてそんなことをいちいち気にするのさ。

女 (泣いた痕跡も見えない顔で、ひややかに) いつでも自分の位置だけは説明できる
ようにしておかなくちゃね。

男 (わからないというふうに首を振って) 一体、どういうことなんだろう? 今、泣い
てたのに。

女 また泣いてあげましょうか?

男 何だって!!

女 御希望とあれば、また泣いてあげてもいいわ。

男 じゃ、今のは、うそ泣き!!

女 ちよっと、呼吸を乱してみただけ。ほら(と肩をしゃくりあげて泣き出そうとする)

男 (一歩さがって)やめてくれ! 気味の悪い!

女 (けろりとやめて)だって、泣くのを見るのが好きなんですよ。

男 (怒って)さては、ぼくをからかったんだな。かなしくもないのに泣いて見せたりして、かなしそうな気がしたからよ。ああいう時、泣いた方がいいんじゃない。

男 (横を向いて)たくさんだ! このビルの中の人間はみんな同じさ。つめたくて、感情つてもがない。まるで、まるで……。

女 機械みたい?

男 なんだ、よくわかってるんじゃないか。

女 本で読んだのよ。ひとくん人間は進歩すると、だんだん機械に近づくんですって。

男 冗談じゃないよ。だけど、わかってるんなら、どうして、もっと人間らしくしようとしないんだい!!

男はボタンの前に、女は上手寄りの壁面を斜めに背にして、足を横に投げ出し、まるで、野原で草をむしりながら腰を下ろしている恋人たちのように話しつづける。

女 (あどけなく)人間らしいって、どんなこと?

男 そうだなあ。うまく言えないけどさ。人間て、もっと、心の底から泣いたり、笑ったり、いろいろなことするんじゃないかなあ。

女 ははははは。(急に腹をかかえて笑い出す)

男、思わず、ぎよっとして、からだを起して女を見つめ、後ずさりする。

女 (笑いながら)ほら、どう、あたしだって笑えるのよ。見てよ。ははははは。

男 よせよ。よせつたら。第一、何が、そんなにおかしいのさ。

女 (びたりと笑うのをやめて)別におかしくとも何ともないわ。ちよっと横隔膜を動かしてみただけ。ただ、あんたが泣いたり笑ったりするのが人間だなんて言うからやってみただけよ。

男 そうじゃないんだ、ぼくが言ってるのは。おもしろい、おかしいという気持があるから笑うんだ。笑うから横隔膜が動くんだよ。横隔膜を動かすから笑うんじゃないんだ。おなじことじゃない。結局、横隔膜は動くのよ。

男 (やつきになって)ちがうつたら。

女 (平然と)おなじよ。

男 (早口に断乎として)ちがう!

女 (早口にきっぱりと)おなじ!

男 (短い間。力なく)もう、よそう。
女 よしましょう。

男 (静かにゆっくりと、遠くの方を見つめる眼で)ぼくは自分が人間だと思いたい、人間だと信じたい。それで、つまり、一刻も早く目的のところへ行つて人間らしく生きていつて、そればかり考えてるんだ。

女 (つまらなそうに頬杖をついて)何だかよくわかんない。

男 何と言つたらいいかな。(また熱心になつて)ほら、ぼくたちは、毎日、人間らしい生活をしてないと思うんだ。朝なんか、もうちよつと寝てたいなと思つても、リーンと目覚まし時計が鳴れば、起きなきゃいけないし、今日は、いい天気だから、一日ゆつくりと海へでも行つてキスでも釣つていたいなあと思つたつて、勤めていればそうはいかない。あれするな、これするなつて何十年間も規則ずくめの学校生活がやつと終えたと思つたら、休む間もなく今度は会社勤め。はたらかなきゃクビだし、はたらけばやり過ぎるとくる。ああ、やだやだ、これじゃ何のために生きてるんだかわかりやしない。わかりやしない。

(ごろりと仰向けになる。)

女 (つまらなそうに)なあんだ、そんなこと。くだらないつたらありやしない。

男 (またはね起きて)君は女だからわからないんだよ、男の、この気持が。

女 ええ、わからないわ。あなたの言つてる人間らしい生活つてのは、それじゃ、朝、いつまでも寝ていて、好きな時にキス釣りに海へ行ければ、それでいいつてわけね。どうも変だな。こんな話をするつもりじゃなかったんだ。だけど、ぼくたちの本当の

人間のくらしつてのは、こんなビルの中にはありやしないんだ。
女 あんた、どうして、そんなこと断言できるの？

男 (立ち上つて)本さ。本にはちゃんと書いてあるんだ。
女 (つられて立ち上り)ああ、四十二階の図書館ね。

男 それにテレビだ。テレビにだつて映つてるんだぜ。
女 三十九階でしょ。

男 何階だつてかまうもんか。ぼくの言つてるのは、海だ、キスだよ。
女 海なら地下一階よ。キスは魚だから、五階。でも地下一階でも泳いでるわ。

男 (いらいらして、両手で耳をふさいで後退しながら)階数のことなんかどうだつていいんだ！

女 (無視して男を追いつめながらべらべららとつづける)高速道路なら三階だし、百貨店なら七階ね。青空なら三千二十四階だけど、五百八十八階にもあるわ。太陽は九千階ちよつど。お月様はちよつとさがつて一千三百六十九階ね。(二人はエレベーターの中でゆるやかな円を描く)それから、あなたの大好きな笑い。笑いは、十八階。そのすぐ上の十九階が涙。恋愛はずっと上の百二十五階。そのすぐ上が結婚で、そのまた上の百二十七階が赤ちゃん。だから、百三十三階が離婚つてわけ、百三十四階が……。

男 (耳をふさいだまま立ち止ってどなる) やめてくれえ！
女 (きよとんとして立ち止る) あら、なぜ？ またたくさんあるのよ。
男 (疲れはてたというふうに、ボタンの下に腰を下ろして) もういいよ、たくさんだ。
女 (立ったまま) このビルがいやなら、あのビルへ行けるのよ、地下四階からね。
男 (力なく) もう行ってきたよ。
女 そのビルへ行けるわ、地下五階から。
男 もう行ってきたんだ。
女 あのあのビルへも地下六階でつながってるのよ。
男 行ってきたったら。
女 じゃ、そのそのビルは？ 地下七階が入口よ。
男 もう、全部行ってきたってば。
女 (いきおいよく男のそばにしゃがんで) ほんと！ すてきねえ！
男 (顔をそむけて) うんざりだよ。考えたくもない。
女 (眼の色を輝かせて) ねえ、聞かせて、あのビルの話。
男 うるさいな。このビルとおんなじだよ。
女 そんなはずないわ。あのビルとこのビルがおんなじだなんて。じゃ、そのビルは？
男 ねえ、そのビルはどこ？
女 そのビルだって、このビルとおんなじさ。
男 (失望して) 変ねえ。それじゃ、あのあのビルも？
女 おんなじだったら。あのあのビルもそのそのビルも、あのあのあのビルも、そのそのそのビルも、全部、全部、ぜんぶ、このビルと、すっかりおなじさ。
男 へえ。一体どういふことなの。
女 あのビルも、そのビルも、どのビルも、全部、このビルにつながってるのさ。どんどんどんどん歩いて行くと、途中で、変だなあって気がする。よく見ると、このビルなんだ。このビルの中を歩いている自分に気がつくんだよ。
男 じゃ、あのビルも、そのビルも、全部、このビルの中にあるってことかしら？
女 まあ、そういうことになるね。
男 (尚も疑わしそうに) あんた、歩いただけだったんじゃない？ 駆けてみた？
女 ああ、駆けたよ。
男 電車に乗った？
女 乗ったさ。
男 自動車にも？
女 もちろん自動車にも乗ったよ。
男 じゃ飛行機は？ 飛行機には乗らなかつたんじゃない？
女 うるさいなあ。飛行機にもロケットにも全部、全部、ぜんぶ乗ったたら。
男 そう。変ねえ。それなのに、やっぱり、このビルの中にいたってわけね。

男 そうなんだ。いつもいつも、おなじことの繰り返し。いいかげんうんざりするよ。
(ごろりと仰向けになる)
女 それでどうなの？
男 何が？
女 まだ満足しないの？ まだあきらめないの？ まだ海やキスのいるところへ行きたいって言うの？
男 (また起きあがって)海やキズなんか問題じゃないったら。
女 だって、あんた、さっき、そう言ったじゃない。
男 たとえばの話だよ。あれはたとえ話さ。君の言う通り、海だって、キスだって、太陽だって、青空だって、このビルにないものはないさ。
女 じゃ、それでいいじゃない。行きたい時、海へでも山へでも好きなところへ行けば。山なら二百二十階から行けるのよ。
男 ほら、それだ！ それがいやなんだ。
女 あたしがいやだっていうの？
男 そうじゃないんだ。山と言えば二百二十階とくるだろ。それ、それ。それが問題なんだ。そういうところから、どこかほかのところへ行きたいのさ。
女 だって、これはあたしの仕事よ。このエレベーターがどこへ行くかってことは、ちゃんと覚えておかなければね。
男 (乗り出して)君の立場とすればそうだろうさ。君だけじゃない、このビルじゃみんなそうなんだ。ぼくはもううたたくた。すっかり疲れちまったんだ。さっきだってそうだ。ぼら、あの二人のとき。トランプ占いの話ばかりしてさ。ここじゃ何もかもばらばらだ。君だってそうさ。「朝から晩までボタンばかり押してさ。(声色をつかって)「上へ参ります。」「御利用の階数をお知らせねがいます。」「いいかげんうんざりしないかい。
女 あんたの方がおかしいわ。そんなこと、あたし、考えてみたもこともない。
男 たまには考えてみるよ。それで人間と言えるかい？ 人間てのは、頭もあれば、足もある。考えたり、笑ったり、歩いたり、いろいろ、全部、つかえるんだ。つかわなきゃいけないんだ。
女 あたしだって笑ったり泣いたりできるわ。さっき、やってみせたでしょ。もう一回やってみせる。
男 (いらいらして頭を振り)全然わかってないんだな。頭もつかってみなさいと言って
女 るんだよ。ボタンばかり押ししてないでさ。
(突然、両手をたたいて立ちあがり)わかった！ なあんだ、それならそうとはじめから言えばいいのに。(短い間。いたずらっぽく、中腰で、男に近づき)あんた、学者ね？
!! そうだ、そうに決まってる。年がら年じゅう頭ばかりつかってる学者なのね。どうしてそのことを先に言わないの。

男 (おどろいて) ぼくが学者だって!! とんでない誤解だ。君は眼があるんだろ!!
このぼくが学者に見えるのかい、本当に?
女 (ちよつと考え込んで) 学者じゃないっての?
男 (憤慨して) あたりまえさ。よく見ろよ。
女 わかった、わかった。今度こそすばりよ。
男 何だい!! 一体、ぼくが何だってんだい?
女 (一語一語区切つて) 私立探偵。どう? 今度こそあたりね。かくしちゃだめよ。
男 ばかばかしい。何を根拠に、ぼくが私立探偵だなんて思うんだい?
女 またちがったか? 変ねえ。
男 冗談じゃないよ。
女 だって、あんた、いろいろ探しまわってるんでしょ。あのビルへ行ったり、そのビルへ行ったり。
男 ちがう、ちがう、ちがう。全部、全部、ぜんぶちがうよ。ぼくは、私立探偵でもなければ、学者でもない、何でもないんだ。
女 (腰をおろして) 何でもいって……。何でもない人間なんて、このビルにいるから!!
男 そう、その人間、人間なんだよ、ぼくは。君の言う通りだ。このビルには人間がいなんだ。いるのは人間の嗜好をした機械、人間の形をした部品だけさ。何年も何十年も歌ばかり歌ってる人間。年がら年じゅうボールばかり追っかけてる人間。(急に元気がなくなつて) ぼくだって一日中帳簿ばかりにらめっこしてる人間だけさ。
男 君もそうだろう、朝から晩までボタンばかり押して……。
女 (別人のような威厳をもつて、ずばりと) 進歩よ。人間は進歩したの。進歩して、前よりもっともつとずーっと人間らしくなつたんだわ。
男 (興奮して立ちあがり) 進歩だって! こんなふうには、人間がばらばらになつちまつたことを、君は進歩だつていうのかい!! 頭があつてもつかわない。足があつても歩か
ない……。
女 (腰をおろしたまま落ちつきはらつて) みんな人間が望んだことよ。長い間、人間はこうなる日を願つて頭をつかつてきたの。そして、とうとうその日がきたんだわ。だから、もういろんなところを全部つかう必要がないってわけ。
男 (さらに興奮して、次第に泣きべそをかいた幼児のような身のこなし、口のききかたをするようになる) ああ、いやだ、いやだ。ぼくは人間だ。完全な人間なんだ。帳簿つけの他のことだつてできるんだ。部品じゃないぞ。こんなビルなんか消えてなくなつちまえばいいんだ! (地団太を踏む)
女 (幼児をあやす母親の口調で) まあ、あんたつたら、おばかさんね。いらつしやい、こつちへ。そんなにお顔をくしゃくしゃにして。おめめをまっ赤にして……。涙を拭

男 いてあげるから、こっちへいらっしやい。

男 (つられて左手で眼をこすりながら、女の言う通りに、女の身もとに頭を投げ出して幼児のように)ぼくね、やりたいことがいっぱいあるんだ。

女 (ハンカチで男の眼から涙を拭き、顔全体を拭いて、最後に、ちんと鼻をかんでやり、そのハンカチをポケットにしまう)とうしてもこのビルを出て行きたいのね。それが目的なんでしょう？

男 そう。だけど、ねえ、このビルを出て行くってことは、手段だけど、目的じゃないんだ。

女 まだまだあきらめられないってわけね。じゃ、何が目的なの。

男 そうだなあ。(夢心地で)あおい、あおい一面の草っ原！

女 地下十四階にあるわ。

男 (ひとり)ごとのようにつぶける)三色すみれなんか咲いててさ。

女 (すばやく男の言葉のあとにつづけて) 十九階よ、三色すみれは。

男 たんぼぼが咲いてる。

女 (やさしく男の髪を撫でながら)二十一階。

男 馬に乗って思いつきりすつとばすんだ。

女 地下九階ね、馬は。

男 つかれたら水を飲んで……。

女 水は地下十階。冷たい泉の水もあるけどミネラルウォーターの方がいいんじゃない。

男 とつても栄養があつて、からだのためになるんですつて。

女 (ちよつと不気嫌に眉をしかめるが、すぐ気を取り直して) 草っ原に寝るんだ、顔の上に帽子をのせてさ。

男 帽子は九十四階。寝る人は、百六十九階へ行くのよ。

女 (顔をおこして女を見て)いやだよ、ぼく。ばらばらにやりたくないつて言ったじゃないか。

男 (男の頭を無理に仰向けて)わかったわ。それからどうするの？

女 しばらくうとうとして眼を覚ましたら、からだを横にして草を二、三本むしるんだ。

男 シャベルは三十二階よ。

女 (怒つて顔を起し)手でむしるんだよ。

男 (男の顔を無理に仰向けて)まあ野蛮ね。でもいいわ。それで……？

女 たんぼぼも取つて、彼女の髪にさしてやる。

男 彼女も連れて行くの？ それは気がつかなかったわ。それならそうと早くおつしや

女 いよ。彼女だから女ね。女は三百九十階にいるわ。

男 (また顔を起こして抗議する) 三百九十階の女はいやだったら。

女 なぜ？ あそこにいる女じゃ気に入らないつての。

男 (だだをこねて足をばたばたやる) いやだ、いやだ。このビルの中のものは、全部全

女 部、ぜえんぶいやなんだったら。

女 (鷹揚に)いいわよ。好きになさい。それで、どうするの。

男 (安心して、仰向けになり、元の夢心地に戻って) 草の根っこについてた土を掌でしばらく揉むのさ。

女 へえ。土をねえ。土は、地下二十九階。

男 それからその掌を持って行って、においを嗅ぐんだ。

女 (つめたい口語で)まるできちがいね。とてもつき合い切れないわ。

男 (顔を起して)何がきちがいさ。

女 土のにおいを嗅ぐなんてさ。

男 いいじゃないか。地下二十九階にある、あんなインチキな土じゃないんだぜ。本物の土だよ、この土は。

女 よしてよ。ばかばかしい。土は土よ。本物もにせものもないでしょ。

男 (むきになって)このビルの土なんか、全部にせものだよ。

女 何言ってるの！ あんただって、このビルから一歩も出たことがなくせに。どうして本物とにせものがわかるのよ!!

男 わかるんだよ、ぼくには。本で読んだんだから。

女 四十二階でしょ。

男 テレビだって見たんだ!

女 三十九階ね。だけど、お気の毒さま。あなたの言葉で言ったら、本やテレビこそにせものよ。地下二十九階のが本当の土だわ。

男 どこで区別するのさ。え、何を証拠に、地下二十九階の土が本物だって言うんだい。

女 ずうーっと前から知ってるのよ、あたしは。証拠なんて要らないのよ。

男 ぼくだって、ずうーっと前から知ってるんだぜ。このビルの中には、本当のものなんか何ひとつありやしないんだってことまでね。

女 一つのまにやら、二人は立ちあがって、腰に手をあて、こぶしを振りあげて、大げさな口げんかをはじめている。

女 じゃ、あんただってにせものじゃない。

男 ぼくは別さ。真正正銘、まじりっ気なしの本物だよ。

女 うぬぼれてるわ。何もわかってなくせに。

男 男が前進し、女が後退する円運動がはじまる。先刻と逆まわり。

男 君みたいな部品に何がわかるんだい!!

女 失礼しちゃうわ。あたしの方がずっとずうーと進歩してるのよ。人間としてね。

男 ボタンばかり押ししていることが進歩だって言うつもりじゃないんだろうね!!
女 ボタンさえ押ししてれば他のことは何ひとつしなくてもいいのよ。洗濯したり、掃除したり、靴をみがいたり、そんなこと何もしなくなつて生きて行けるのよ。どう、うらやましいでしょう!!

男 あわれな機械の部品になりさがつたつてわけだ。
女 土や草をこねまわすのが人間だとも言いたいの?
男 ボタンばかり押しするよりはね。
女 あんたは古代の遺物ね。化石よ。
男 君は機械だ。ねじだ。歯車だ。
女 (円運動を止めて、まるで遠く離れた相手を罵倒する時のように怒鳴る) 浦島太郎! くそじじい!

男 (おなじく怒鳴つて) 宇宙人、おぼけえ!
女 ろくでなし!
男 おたんこなす!
女 ひょうろくだま!
男 おかちめんこ!

女・男 (同時にあかんべえをする)
女 (しばらくあかんべえをしていたが、突然ぱつと身をひるがえしてボタンのところへ駆けて行く) ようし。
男 (あわてて女の後を追つて) あ、いけねえ!
女 (今しがたのことは何もなかったみたいに、別人のような威厳を持つてボタンを押しながら) 上へ参ります。御利用の階数をお知らせねがいます。(奇妙な音がして、エレベーターはどンドン昇りはじめる)

男 (ボタンの近くまで右手を差し延べた恰好で、まるで雷にでも打たれたかのように、床に左手をついて) だめだ、だめだ。上はだめなんだ! (しかし、その声には力がない。まるで哀願の調子である)
女 (つめたく) 御利用の階数をお知らせねがいます。
男 (息も絶え絶えといった感じで) おねがいだ。やめてくれ。上だけは行かないでくれ。もうたくさんだよ。たくさんなんだ。ぼくは……。つかれちまったんだ。(へたへたと床に伏せてしまう)

女 (声はひややかだが、ゆっくりとその男を見おろして) どうしたの? 少し大げさよ。
男 (つつ伏したまま、弱々しく) 本当なんだ。ぼくは、もう絶望してるんだ。上にはもう何もないんだよ。
女 あまつたれないで。このビルには何でもあるのよ。
男 (少しずつ顔を起して) 知ってるよ。だけど、上にはないってことがわかったんだ。上にはいろいろいろなものがあるわ。まだまだあんたの知らないものが。

男 (必死になって) 信じてくれ。もう何年も何十年も何百年も、上だけは、全部、全部、
ぜんぶ探して歩いたんだ。
女 信じられないわ。
男 本当だよ。自動エレベーターで探して歩いたんだ。上には何もなかったんだよ。
女 (少しやさしくなって) あんたは大げさよ、何十年何百年なんて！ 一体、あんた、
いくつなの？
男 (上半身を起して) 歳なんて関係ないじゃないか。このビルじゃ、毎年元日になると、
適当に自分の好きな歳を決めてるくせに。君だってそうだろう？
女 そりゃそうだけど、何十年何百年も探してるなんて大げさだわ。
男 本当なんだよ。おとうさんも、おじいさんも、ひいおじいさんも、ひいひいおじいさ
んも、ひいひいひいおじいさんも、そのまたもつと前のおじいさんも探してたんだか
ら、絶対まちがいないんだったら。何百年どころか何千年にもなるんだぜ。
女 (かなりやさしくなって) 御苦労さま。だけど、そんなに長い間、一体、何を探してる
のよ。
男 出口だよ。さっき言ったろ。このビルの出口を探してるんだよ。
女 ああ、それがあんたの目的だったのね。
男 (激しく首を横に振って) ちがう、ちがう。目的じゃない、手段だよ。出口を探すって
のは手段さ。さっき言ったじゃないか。
女 (たたみかけて) じゃ、目的は？ 出口を探してどうするの？
男 (そろそろ立ちあがって) このビルから出て行くんだよ。脱出するんだ。
女 それで、その出口からどこへ行くの？
男 目的のところさ。
女 だから、そこはどこ？
男 (つまって) このビルじゃないところだよ。
女 どんなどころよ？
男 つまり……。 (しどろもどろで) すばらしい世界さ。
女 どんなにすばらしいの？ くわしくおっしゃいよ。
男 つまり、つまり、ほら、土があつて……。
女 地下二十九階よ、忘れないで。
男 たんぼぼが咲いてて……。
女 二十一階よ。
男 草もある。
女 地下十四階。
男 そんなじゃないって言ったろ。本物の土と本物のたんぼぼ！
女 三十九階で見たのね。
男 それに、いいかい、本物の人間だ！

女 本物の人間!!
男 そうさ。本当の人間だ!
女 人間にも本物とにせものがあるの。
男 あるとも。このビルの中の人間は、全部全部、ぜんぶにせものだ。ばらばらに自分のからだをつかつてる。機械の部品だ。片輪者だ。
女 じゃ、あんたもにせものね!!
男 このビルの中にいるかぎりね。だけど、ちがうんだ! このビルから出さえすれば、本当の人間になれるんだ。
女 (かなり興奮を示して) ねえ、本当の人間で何をして暮らすの?
男 海へ行って……。
女 キスを釣るんでしょ。さっき聞いたわ。
男 キスだけじゃない。あ、じも釣る。
女 六十九階にあるわ。
男 秋になったら鋤で土をたがやして……。
女 鋤って農機具ね。四百七十七階。
男 大根の種を蒔く。
女 ちよっと上になるけど……。六百二十七階、大根の種は。
男 それから、こやしもまくんだ。
女 なあんだ。百姓やるの!!
男 心もからだ全部つかうんだよ。自分の食べるのは自分で作るんだ。
女 百姓なら百姓って早く言いなさいよ。八百四十一階。大農場があるの。あそこで思う存分、百姓やれるわ。
男 君にはわからないんだよ。そんなことより……。 (と、すばやくボタンに突進する)
二人、しばらく操作ボタンの前で揉み合う。そのうち、どちらのからだかボタンにぶつかったらしく、急に、奇妙な音を立てて、エレベーターは降りはじめる。
女 (上手寄りの壁面に、よろよろと放り出されて腰をおろす。あきらめたように、そのまま、そこへすわり込む) いいわよ。好きになさい。だけど、……。 (息づかいが荒い)
男 (腕をさすって) ゆるしてくれよ。もう二度と、このエレベーターには乗らないからさ。
女 (まだ肩で呼吸しながら) なぜ、そんなに上へ行くのをいやがるの? 下へばかり行きたがるの?
男 すっかり、上は調べつくしたんだよ。何年も何年もかかってね、それでもうへとへとなんだ。
女 ああ、そのこと。出口を探してるんだったわね。でも、下へ行ったってありやしない

わ。どこにないのよ、出口なんか。あきらめなさい。あんたも、あたしも永久にこのビルから出ることなんかできないんだから。

男 (突然、両手をつけて、女に近づき) 教えてくれ！ おねがいだ！（と頭を下げる）
女 (腰を下ろしたまま後ずさりして) だめよ、知らないったら。出口なんかないって言ったでしょ、このビルには。あんたの方が、あたしよりよく知ってたじゃない。どこへ出て行っても、結局、このビルへ戻ってきてしまうって。

男 (四つん這いのまま迫って) そうじゃないんだ。出口のことじゃない。出口は二の次なんだ。いや、出口と大いに関係がある。ぼくが下へばかり行きたがるのはね。

女 (床に腰を下ろしたまま後ずさりをつづけ) 知らないったら、知らない、知らない。あたしは何も知らないのよ。(その声は悲鳴に近い)

男 (がまがえるのように手足を交互につかって女の方へ前進し) 誤解だ。君は誤解してる！

女 (まるで強姦を迫られている女のように必死になって、エレベーターの中を円を描きながら、いざって後退を続け) たすけてえ！ あたしは、何も知らないのよ。

男 (ますます執拗に迫って) 下へ行くんだ！ 下へ行けば……。

女 (ついにボタンの近くまでできて) 行くわ、行くわ！ 何でも言う通りにするから、ゆるして。ね、おねがい。

男 (四つん這いのまま止って、蛇のように、女をにらみながら) 地下三百三十三階の次で止めるんだ。

女 (おうむ返し) 三百三十三階の次!!

男 そうだ。(立ち上って操作ボタンの前に進み) この数字が書いてないボタンのことだ。

女 (ふらふらと操作ボタンを背中なかくすように立ち上がり) この白いボタンのことね。早くしろよ。その白いボタンを、いくつどう押せばいいんだ!!

男 (上眼づかいに男を見て) 後悔しないわね。

男 誰が後悔なんかするもんか。わざわざ君みたいな女の操作しているエレベーターに乗ったのはそのためなんだ。自動エレベーターにはそのボタンがないんでね。

女 あそこへは呼ばれた時だけしか行きたくないんだけど、でも、そんなに言うなら仕方がないわ。

男 (少し不安になって) ぼくだって、もう他にどうにも仕様がなないんだ。このビルを出るチャンスは、地下三百三十三階の次にしかないような気がするんだよ。地下三百三十四階へ行きさえすれば……。

女 地下三百三十四階なんてないわ。地下三百三十三階の先には、ずうーと、ずうーと、どこまで行っても階数なんかないのよ。

男 (不安になって) どこまで行ってもって、一体、このビルの地下はどうなってるのさ!!

女 知らないわ。多分底なしよ。

男 底がない!! じゃ、このビルは、どんなところに立ってるんだ!!

女 その階数のない白いボタンのところで、このビルを支えているのよ、どんなことがあつてこのビルが倒れてしまわないようにね。だけど、そこへ行けば何があるのか、今まで、あたしは見たことがないの。

男 それにしちゃ、よく知ってるじゃないか。

女 おかあさんやおばあさんや、ひいばあさんや、ひいひいおばあさんや、ひいひいひいおばあさんや、そのまともつと前のおばあさんから聞いていたことよ、きつと。

男 (ひとりごとのように) ぼくは行かなければならない。それ以外は、このビルを出る道はないんだ!!

女 (これもひとりごとのように抑揚のない声で) あそこへ行っても、恐らく出口はないと思うの。だって、さつきも 合図があつて行ってきたんだもの。

男 さつきもつて?

女 そうよ。あんたもすれちがったはずよ。トランプ占いに熱中していた二人の男。

男 遭つたとも。あの二人がどうしたつて?

女 担架でかついで行つたひと、あそこから乗せてきたの。

男 ああ担架……。 (思ひ出そうとして) ひとが乗っていないのか!!

女 そう。多分、死んでたわ。だから、いやなのよ。仕事だから行くけど、本当は行きたくないの、あそこへは……。

男 死人が担架で……。

女 あんた死ぬわよ、きつと、あそこへ行くと。

男 (きつと女を見据える)

女 (幽鬼のように薄笑いしてゆっくりと) どうする!! それでも、あんた、あそこへ行きたい?

男 (ちよつとためらうが、きつぱりと自分に言いかけさせるように) 行かなくちゃ。ぼくはどんなことがあつても行くんだ。いそいで、そのボタンを押してくれよ。

女 いいわ。(ゆっくりと操作ボタンの方を振り向いて、ボタンをいくつ押しつづける) もうすぐよ。(ゆっくりと振り向いて) 今度は、あたし、最後まで見ているつもりよ。扉を開けたまま、あんたが帰ってくるのを、待ってあげるわね。(またゆっくりと操作ボタンの方へ顔を向ける)

ややあつて、エレベーターの止まる奇妙な音。

女 (今までのことは何もなかったような白々しい声で) お待たせいたしました。(扉を開ける。男は眼をつむって呼吸を整えると、下手へ向つて、からだを前かがみにして騎虎のいきおいでとび出して行く。―登場の際のようにS字型を描いて行くのではなく、そのまま下手へ退場する。―女は、その男のうしろ姿をじつと見送っている)

エレベーター内部を照らしていた照明が、女だけを操作ボタンの前に残して、暗くなり、同時に衝撃的な破壊音が重層的に響き渡る。猛烈な、耳を襲せんばかりのもので、砲弾の破裂音、機関銃を打ちまくる音等から、原水爆の爆発等、ありとあらゆる、考えられる限りの破壊装置の、めくるめく閃光、音響がしばらく場内を圧する。(約一分間)やがて、男は、エレベーターの扉近くの中へはいずり込む。しばらく左手を長く伸ばしてうつ伏せに倒れたまま。下手ソデで行われているはずの、この破壊の風景を女は、エレベーターの操作ボタンの前に、彫像のように身じろぎもせず立ったままじっと凝視している。以上の場景は、はじめのとき、観客に滑稽な感じを抱かせたようなことがあったとしても、打ちつづく閃光、炸裂音のめくるめきの中に、やがて、人間の破壊行為に対する嫌悪から恐怖に至るまでの、あらゆる感じを呼び起すものでなければならぬ。男がすっかりエレベーターの中へうつ伏せにおさまるまで、女は操作ボタンの前で、彫像のような姿勢を崩さずにいたが、やがて静かに扉を閉める。すると、それをきっかけのようにして一瞬のうちに、下手ソデにおける光と音は消失して、エレベーター内部は明るくなる。

女 (扉の方を向いたままで) 上へ参ります。
男 (かすかにうめいている)
女 (前よりやや大きい声で) 上へ参ります。

奇妙な音を出して、エレベーター昇りはじめる。

男 (うめき声、やや大きくなる)
女 (それまで操作ボタンの前で、耐えていたのが、急に首を左右に二三度振ったかと思うと、堰を切ったように男の傍に駆け寄って、男の背中に手をかけ) 行かなければよかったのよ。あれほど言ったのに。
男 (苦しい息の下から) これでいいんだ。出口はなかったけど……。
女 (しくしく肩をしゃくり上げて泣きながら) あたしが悪かったのよ。どんなことされたってボタンを押さなきゃよかったんだわ。……出口なんか、このビルには、どこにもありやしないのよ。……でも信じて！ あたし、本当に知らなかったの、あそこであんなおそろしいことが行なわれているなんて！ だって、いつも、あたし、ただ呼ばれて降りて行くだけなんだから。そうすると、あんなのような、あんなのような・。(女の言葉の途中から、そろそろとからだを起して、女の方に向き直り) 泣いてるんだね！ 君は、今度こそ本当に、ぼくのために泣いてくれるんだね！
女 (無理に、微笑もうとして、泣き笑いを浮べ、男の後頭部を右手で押えながら) 泣いてなんかないわ。ちょっと肩をしゃくりあげてみせただけ。さっきやってみせたで

しよ。

男 (その女の言葉には取り合わずに、仰向けになって、歓喜に満ちた声で) そうか。これでいいんだ。出口はなかったけれど、このビルの中で、何とか……。やっで行けばいいんだ。……もつと、人間が、……。進歩して、(とぎれとぎれに) あきらめちゃいけないんだ、あきらめちゃ……。 (仰向けの姿勢のまま、がっくりと、こと切れる。その姿勢は、開幕の時、エレベーター内部に横たわっていた水色のシャツを着た男の死体と、奇しくも同じである)

女 (吠えるように、男の頭をかかえて) 死んじやいけない! まだ出口があるかもしれないのよう! 死んじや、だめだったら! (しかし、あきらめて、男の頭をそつと床にはなす。短い間。女は静かに操作ボタンの前へ戻ってきて、彫像のように立つ。すばやくボタンをいくつか押しつつける。仮面のような無表情。) 上へ参ります。(短い間) わかつてるわ。やはり六階へ行くしかないわ。(短い間) さあ、着いたわ。(短い間) お待たせいたしました。六階でございます。

奇妙な音を出してエレベーター止まる。女、静かに扉を開ける。

女 (機械的に次第に速くなる繰り返し、三回目からエコーとなる) お待たせいたしました。六階でございます。お待たせいたしました。六階でございます。お待たせいたしました……。

下手から、死体運搬人1と2が、「ソロモンの指環」の練習をしながら、担架を持つて、ゆっくりと登場。

死体運搬人1 クラブのキングは?

死体運搬人2 「虚栄に身をほろぼします。」

死体運搬人1 ダイアのジャック!

死体運搬人2 「口で言っているだけではダメ。一つ、実際にやってみなさい。」

死体運搬人1 ハートのナイン!

死体運搬人2 「二世誕生。……しかも近い将来。」

死体運搬人1 もうひとつ。ハートのシックスは?

死体運搬人2 「ここが思案のしどころです。いつまでも感情にひきずられてはいけません。」

女 お早くねがいます。

死体運搬人1 (担架を下ろしながら) ハートのキング!

死体運搬人2 (担架を下ろして、間髪を入れず) 「速やかに結婚すべし。待つ程悪し。」

死体運搬人1 もう大丈夫だ! それさえできれば……。

死体運搬人2 (調子に乗って)とんどん聞いてくれよ。何でも来いだ。

死体運搬人1 ようし、行くぞ。ハートのジャック!

死体運搬人2 「八方美人、必ずしも悪徳ならず。」

死体運搬人1 クラブのクイーンは?

死体運搬人2 「あまり気どるとかえってこっけいに見えますよ。」

死体運搬人1 スペードのキング!

死体運搬人2 「ひどい誤解。」

死体運搬人1 スペードのシックス!

死体運搬人2 「なにも、やけくそになることはありません。また新しく種をまく事から

お始めなさい。」

死体運搬人1 すばらしい! 完全だよ。もう何も言うことなし、だ。

死体運搬人2 (興奮して死体運搬人1の左肩をボクシングスタイルで軽く打って)ど

んどん聞いてくれ。さあ来いだ。

女 お早くねがいます。

死体運搬人1、2、ちらりと女を見るが、再び練習をつづけながら、のろのろとエ

レベーターの中へ入って行く。

死体運搬人1 クラブのエイトは?

死体運搬人2 「この機逸すべからず。千載一遇ですから。」

死体運搬人1 ダイヤのナイン!

死体運搬人2 「お金を拾うでしょう。貰っておきなさい。」

死体運搬人1 クラブのジャック!

死体運搬人2 「嘘はつかぬよう。」

二人は、いつのまにか、エレベーター中央に、男の死体をはさんで向い合っている。

死体運搬人1 ハートのクイーン!

死体運搬人2 「よろず良し。大吉。」

死体運搬人1 完全無欠! 言うことなし、だ! (死体運搬人2の肩を右手でたたく)

死体運搬人2 ばんざあい! (跳び上って、死体のまわりを駆けまわる)

女 (肩の方を向いたまま、つめたく)お早くねがいます。(死体運搬人2、片足をあげた

ままの姿勢で駆けまわるのを中止する)

死体運搬人1 (男の死体を抱き起して)でも、まだ油断はできないぞ。

死体運搬人2 (死体の両足を持って)それもそうだな。やってみてくれ、おねがいだ。

死体運搬人1 (死体をエレベーターの外へ運び出しながら)ダイヤのエイト!

死体運搬人2 「美しい乙女が恋しているが残念ながら気づかずに終るでしょう。」

死体運搬人1 スペードのセブン！

死体運搬人2 「外出すると馬鹿を見ます。」

死体運搬人1 ハートのエイト！

死体運搬人2 「愛は死よりも強し。今は愛することがすべてです。」

死体運搬人1 「死体を担架に載せながら」クラブのナインは？

死体運搬人2 「おなじく死体を担架に載せながら」幸福はやってきます。必ず……。」

死体運搬人1 「死体に白い布をかけてやりながら」それから？

死体運搬人2 「死体の足もとにかけていた白い布を持った手をとめて、思わず」まだあ
とがあったつけ？

死体運搬人1 「失望して」やっぱり、有頂天になるには、少し早過ぎたようだな。

死体運搬人2 「おどおどとして」何てこった、ここまでできていながら。

死体運搬人1 さっきもそこだったぜ。その先が出てこなかったんだ。

死体運搬人2 「べそをかいて」頼むよよ。ちょっと考えさせてくれ。

死陸運搬人1 「死体の足まですっぽりと白い布をかけてやって」どうぞ、ごゆっくり。
だけど、行くぜ。（と担架を持ちあげようとする）

死体運搬人2 「あわてて担架を持ちあげるが、音を横に振って」幸福はやってきます。

必ず……。」と。……なあんだ、ばかばかしい。「しかし、ゆっくりと。」

じゃないか。ははははは。こんな簡単な言葉が出てこないなんて、どうか
かしているぜ。「しかし、ゆ、っくりと。」だつてさ。どうだい、いいん
だろ、これで。

死体運搬人1 おそいよ。それじゃ占いになりやしねえ！

死体運搬人2 悪かった、悪かった。今度こそ大丈夫だよ。先をつづけてくれ。

死体運搬人1 しっかりしろよ。（気のない声で）ハートのテンは？

死体運搬人2 「ひとりで張り切って」情熱がすべてを決定するでしょう。」

死体運搬人1 「前の調子を取り戻して」クラブのセブン！

死体運搬人2 「ますます元気で」友人の誤解は悲しい。しかし恨んではなりません。」

死体運搬人1 「すでに下手へ退場している。声のみ」クラブのテン！

死体運搬人2 「これも下手へ退場している。声のみ」変な想像はやめたがよろしい。身
体にもよくありませんから。」

上手のエレベーター内部、操作ボタンの前には、依然として、女がひとり彫像のよ
うに立っていたが、死体運搬人1、2が下手へ退場すると、しばらくして、ゆっく
りと扉を閉める。

女 （無表情につめたく）上へ参ります。御利用の階数をお知らせねがいます。

エレベーターが始動する時の奇妙な音。つづいて昇って行く音がつづき、照明が、エレベーターの急速な上昇を示して――。

註・本編の中のトランプ占いの言葉は、著者も出版社も不明な、恐らくは終戦後あまり日が経っていない頃に発行されたトランプ遊びの本からの引用が大部分を占めていることを、ここで断っておきたい。あまり紙質も上等でなく、やや黄ばんでいた上に、当時（十年以上も前）すでに表紙も奥付もなく、いわば本の体裁をなしていないものだったせいか、その後貧しい私の書齋の中からも姿を消してしまつて今日に至ったが、どなたかこの占いの本の著者と出版社を御存知の方があれば、御教示いただけると幸甚である。